

はじめて

私が「氷室」にとても大きな興味を持っ
たのは、この記事を書いた頃のことです。
二、三年間で研究してみたいという思い
にかられました。いつもの通り、一冊の
国語辞典を片読を聞くことから始めた
のでした。

氷室家である奈良には五、六回も行
き、氷室神社に御掃帚を見に行きました。
氷室訪問記、有名な権原孝古字研究所も訪
ねました。巻福担当にもお会いしてそ
の時の写真もいただきました。所長の菅
谷明先生は、この時期、滋賀県立大学の
教授にいらして研究所にはおられません
でした。「氷室の本を作る」ということ
で、「無理無理にお願ひして送っていた
だいた原稿は大きな紙に草書で長文を書
いて下さり、そして「奈良の古代氷室」と
して下さり、お願ひして送りました。

二〇〇一年七月に執筆した「氷室のは
なし」に納めてあります。機会があれば
また「説く」ことを、今年の氷室まつり
では千九百回になります。一月末、二
月初旬に採集がめがありますので、戦車
小学校へお越しください。
村外からもたくさん登山家や氷室愛
好者など、手箱山中腹の氷室小屋に
集合します。お越しのお酒、いのしし汁
などいろいろあります。ただし、お弁当は持
参願ひです。

※ 氷室まつり
2000年2月1日(土) 前夜祭
2日(日) 氷室へ水まつり行事
連絡先 いの町本川支所 氷室係
05000(0500)2111

はじめて
書に吐くつれづれ

土居 修

メジャーデビュー曲『東京』
でマイ・ペースが繰り返した
「君の住む美しい都」の大学に
入学したのは、その4年後の
1978年。二十歳のときで
あった。そのときから、「君」
を求める私の遍歴が始まった
と、いつかよ。

酒に溺れ、〇〇〇〇に興じ
る日々。私にとっての学問は
退廃の香りを身にまとい、無
頼の風体をして「君」を探す
ことであった。大学の授業で
得られる些末な知識群は、私
を解体し、「君」の存在を無
にする。そうささやかなら開歩
した記憶。授業に出席しない
ことが反骨であり、反スタで
あると信じた青春でもあった。
そうした日々を送りながら
も、行動の指針としての価値
を文学に認めていた。それは
ものあわれみに殉じた川端康
成や男の美学を教養として
立原正秋に心酔した高校時代
の読書体験があったからであ
る。「書を読む」という行為
を中絶しなかったのは、「君」
との出会いを心の片隅で期待
していたのかも知れないと追

本川村越前門・寺川地区村お
こし協議会による十一回目の
「氷室まつり」が終わった。二
月、村内外百人ものがにぎわった
手箱山での水詰めから、七月二
十一日の氷献上まで、およそ五
カ月わたる行事であった。
奈良に都があったころ、天皇や
身分の高いごく一部の貴族たち
が氷の儀式を行い、夏に食する
という習慣を極めたものとして
知られるが、その後、将軍や藩
主にも納められるようになり、
それに欠かせないのが各他の氷
室であった。こうした習慣は一
般には江戸時代初期まで続き、
手箱山氷室も「二代藩主山内忠
義の時代に終わった」と「寺川
郷談」(一七五二年)に書かれ
ている。

近年「氷室」にちなんだ村おこ
し活動やまつりが各地で話題に
なっている。ところが、県外の
多くが、昔の氷室跡が発見され
その修復・再現によって氷まつ
りを行っているのに対し、手箱
山の氷室跡はまだ発見されな
いまま、まつりは全国一の規模
である。実物がないので、新た
につくってやるというのがおも
しろい発想である。
伝説以外に何も無いが、そ

時を振り返って思。
戦後文学の旗手として活躍
した大江健三郎、さらには全
共闘世代に圧倒的に支持され
た高橋和巳を既読した。しか
しなが、渴望が満たされる
ことなく焦燥感に苛まれ、
「君」はもはやいないのだと
いく日々は辛かった。
3年に進級した夏のある日、
涼を求めて手に入った古本屋で
一冊の小説を手にした。人は必
ず死ぬという真実。短い人生
に何を求めるかはひとそれぞれ
だ。だが、誰かひとりでも幸
せにすることができれば、そ
こに価値を見出すことができる
と知った。堀辰雄の「風立
ちぬ」は死と生の実相を私に
教えてくれた。文学で号泣し
た初めての経験であった。
「君」に出会うことが
できるという信念を抱いて、
堀辰雄を次々と読み漁った。
それは大学の授業よりはるか
に魅惑に富んで、愉悅の時間
であった。

そして、遂に紀行随想文
『大和路・信濃路』の一節に
よって「君」との出会いを果
たすこととなる。「いま、秋
篠寺とどう寺の(中略) 秋
篠寺にある伎芸天女の像をし

所感 雑感 手箱山の氷室とまつり・考

(高知新聞2001年8月24日「所感雑感」の記事を掲載) 宮川敏彦(元氷室まつり実行委員)

はさすがに「寺川郷談」、
たいした後ろ盾というほか
はない。しかし考えてみれ
ば、「昔、氷室があった」と
いう「程度」の記述がかえっ
て真実をおび、揺るぎな
い事実のごとく、私たちが
その世界に引き込む。舞台
も上々、「お留め山である
大山、手箱山」とあって、
まします神秘的な雰囲気
になってくるのである。
十一年前、手箱山に氷室
を作り、幾度も資材を上げ
水を詰めしたのは十数人だけ
であった。まつりもほとんど
自力で行いながら、次第
に仲間を作り、協力者を得
てきたのも地域の人たちの
努力によるものであった。
回を重ねるたびに、水詰め
と氷出しの作業はたくさん
の村内外の協力者によって
支えられてきた。今年のま
つりの準備にもたくさん
の自発的な支援者が駆けつけ
た。氷室まつりは、今年か
ら「国道一九四号広域観光
推進協議会」(本川村・音
北村・伊野町)が支援する
ことになって、新たな内容
も加わった。

「なに、感激してるのよ。ば
かじゃないの」
隣に立っていた妻が私を叱っ
ていた。初めて吐かれた。う
るさくとかで咳やくしかなか
た。ことばにすればこの一瞬
が野暮になってしまっ
「早くしてよね。寒いんだか
ら」
しばらくして、堂外から妻の
声が聞こえてきた。なおも私
を叱っているのである。寒い
のは俺のせいじゃないと咳や
きながら、妻を追いかけた。
腹立ちまぎれに「それにし
て」と考えた。悲しいかな、
伎芸天女のプロポーションに
は程遠いことよ。妻は私を振
り返り、不審そうに眺めてい
たが、そのときの私の悲しみ
の理由はおそらく今でも理解
していないだろう。

みじみと見てきたばかりのと
ころだ。このミニユズの像は
なんだか僕たちのものよう
な気がせられて、わけてもお
慕わしい」
近代的知性で愛と死をめぐ
る問題作品化した堀辰雄が
「東洋のミニユズ」と称えた
伎芸天女。「僕たちのもの
のような」の文言が私を鋭く貫
いていく。彼女こそが私の
探している「君」であること
躍らせた瞬間であった。
その日から写真その他の情
報はすべて遮断し、彼女に会
うことのみを誓って過ごした。
しかし、大和路への距離は如
何ともし難く、望みを果たす
ことなく2年後にどうにか大
学を卒業し、帰郷した。

「どうして」と問いながら、
妻は何かを言いたそうにして
いた。
「だって、あなたが青春を刻
んだ街じゃないか」
伎芸天女に会いたい
という一念。妻が大
学時代を奈良で過
したという偶然が私
の策謀を正当化して



「なに、感激してるのよ。ば
かじゃないの」
隣に立っていた妻が私を叱っ
ていた。初めて吐かれた。う
るさくとかで咳やくしかなか
た。ことばにすればこの一瞬
が野暮になってしまっ
「早くしてよね。寒いんだか
ら」
しばらくして、堂外から妻の
声が聞こえてきた。なおも私
を叱っているのである。寒い
のは俺のせいじゃないと咳や
きながら、妻を追いかけた。
腹立ちまぎれに「それにし
て」と考えた。悲しいかな、
伎芸天女のプロポーションに
は程遠いことよ。妻は私を振
り返り、不審そうに眺めてい
たが、そのときの私の悲しみ
の理由はおそらく今でも理解
していないだろう。
妻の麗しき感傷を巧みに操
り、新婚旅行という記念すべ
きセレモニを愚弄した罪は
生涯をかけて償おうと、夜の
猿沢池を歩きながらひそかに
誓った。しかし、30数年をど
もに歩んできて、もうどうで
もいような気がしている。
これまでに幾度となく吐られ
たことで自殺できるのではな
いか。ただ、この策謀の1件
だけは胸中深くに埋めて、齋
場まで秘めていかなければな
らぬだろうと思っている。